

《研究ノート》

スポーツ文化財としての
オリンピック関連資料の収集について 第四報
— 1928 年第 9 回アムステルダムオリンピックに関する収集体 —

*Forth Report on Olympic memorabilia, constituting sports cultural assets,
relating to the 1928 Amsterdam Olympic Games*

藤 瀬 武 彦*

Abstract

The author has presented part of a collection of Olympic memorabilia relating to the 1928 Amsterdam Olympic Games. The fourth report includes the autographed photo of Mikio Oda who became the first Japanese Olympic gold medalist, the autographed writing book by Kinue Hitomi who became the first Japanese woman to be an Olympian and a medalist, and the autographed photo of Leni Junker who was a German female sprinter and won the bronze medal in the 4 × 100m relay. In addition, the commemorative photo album owned by an officer of Japanese team, the Olympic memorial shield presented to Kintaro Usuda who participated in boxing, and a commemorative report on the welcome party for Olympic athletes were showed. Finally, Olympic spectators, including the media, should watch the competitions without undue expectations and pressure on athletes, reflecting on what happened when Hitomi lost in the women's 100m semifinal.

Keywords: Amsterdam Olympic Games, memorabilia, Mikio Oda, Kinue Hitomi, Leni Junker, Kintaro Usuda

1. はじめに

第 9 回オリンピック競技大会は、1928 年（昭和 3 年）7 月 28 日（開会式）から 8 月 12 日（閉会式）までオランダのアムステルダムで 46 カ国から 3,014 名^{注 1)}の選手が参加して開催された。第 1 次世界大戦後の第 7 回アントワープ大会や第 8 回パリ大会では、ドイツなどの反連合国の参加がなくオリンピック精神を満たす大会ではなかったが、第 9 回大会にはドイツも参加してドイツ人選

* Takehiko Fujise

新潟国際情報大学 経営情報学部 経営学科
〒950-2292 新潟市西区みずき野 3-1-1

Department of Business Administration, Faculty of Business and Informatics, Niigata University of International and Information Studies, 3-1-1 Mizukino, Nishi-Ku, Niigata City 950-2292

手が金メダルを10個（銀と銅メダルを併せて合計31個）獲得するなどして活躍し、国際的な平和の祭典として大成功をおさめた大会であった。1896年第1回アテネ大会では女子競技が存在しなかったが、1900年第2回パリ大会でテニスとゴルフに女子選手が初めて参加し、オリンピックのメイン競技である陸上競技に女子種目が初めて採用されたのはアムステルダム大会であり、種目は100m、800m、4×100mリレー、走り高跳び、円盤投げの5種目に限定されていた。日本はこの大会の陸上競技に選手17名を派遣したが、そのうち女子選手は人見絹枝選手のみで日本人女性としてオリンピック第1号となっただけでなく女性メダリスト第1号にもなった。

この大会での日本選手の成績としては、陸上男子三段跳びで織田幹雄選手が15m21の記録を出して日本人初の金メダルを獲得し、競泳男子200m平泳ぎでも鶴田義行選手が2分48秒8の記録で金メダルを獲得した。また、陸上女子800mで人見絹枝選手が2分17秒6の記録で、競泳男子800mリレーで日本チーム（米山 弘、佐田徳平、新井信男、高石勝男）は9分41秒4の記録とともに銀メダルを獲得し、さらに競泳男子100m自由形で高石勝男選手が1分00秒0の記録で銅メダルを獲得した。以上のようにオリンピック参加がまだ4回目であった日本選手がこのように大活躍した大会であった。

2. 収集品と解説

1) 日本人の初金メダリスト織田幹雄氏直筆サイン入り写真及びサイン色紙

日本人初のオリンピック金メダリストである織田幹雄氏(1905年3月30日－1998年12月2日)とほぼ同時代に早稲田大学（以下早大）競走部に所属していた部員のものであったと思われる古アルバムには、部員個人や集合写真など合計87枚が貼られていた。このアルバムの中に織田氏のサイン入り写真があったので紹介する。写真1-1は、日本人初の金メダル獲得の写真として多くのスポーツ史関連書籍等に紹介されている有名な写真に織田氏のローマ字による直筆サインが書かれたものである。1928年8月2日に実施された三段跳びの予選（当時は予選で3回跳躍して上位6人が決勝で3回跳躍を行い、予選を含めたベスト記録で順位が決定した）では、織田氏は2回目に15m21を跳んで予選を1位で通過し、決勝では踵の痛みで記録を伸ばせなかったが予選の記録で優勝した。写真1-2は、早稲田グラウンドでスタートダッシュの練習をしている織田氏のサイン入り写真である。場所は早大の学部予科として新宿区戸山町に1920年（大正9年）に設立された旧制早稲田高等学院のグラウンドであり、当時の早大競走部の練習場所であった（旧記念会堂があった場所）。写真1-3は明治神宮競技場での織田氏の跳躍の写真にサインが書かれている。織田氏の著書である「金メダル」に「1926、神宮競技大会にて」と説明書きのある写真の織田氏の早大ユニフォームや競技場の風景が同様であることから第3回明治神宮体育大会時（1926年10月29日～）のものかもしれない。この大会で織田氏は三段跳びで14m425の記録で、十種競技では6784点（日本新記録）で優勝している。

写真1-4の説明書きには「All inter college に優勝して獲得した賞牌を前に 早稲田町合宿にて 右より小生、織田さん、・・・」と記載してあることから、左端（右となっているが向かって左）の人物がアルバムの元の持ち主の小池省吾氏だと思われる。「早稲田大学競走部七十年史」にも同じ写真が掲載されており、説明書きには「最初の馬場下の合宿所（昭和5年）」となっているが、写真中の小山勝太氏は昭和4年度（1929年度）に卒業していることやアルバムの最初のページに「1929」と記載されていることから、1929年5月25～26日に甲子園で開催された第2回日本学生陸上競技対校選手権で優勝した後に、新宿区馬場下町（現在の第一文学部近辺）にあっ

た競走部の合宿所で獲得した優勝カップや楯の前で記念写真を撮ったものと思われる。この写真中の直筆サインは能和信一氏のものであり、1930年第3回日本学生の手ハンマー投げで39m50の記録で2位になっている。なお、写真1-5は織田氏がよく色紙等に行った「精進」の毛筆による直筆サインを参考として掲載した。



写真 1-1. アムステルダム大会での三段跳び
(直筆サイン Mikio Oda Amsterdam 1928：縦
104mm × 横 137mm)。



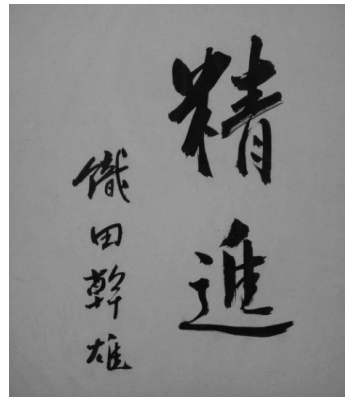
写真 1-2. 早稲田グラウンドにてスタート練習
(直筆サイン Mikio Oda：縦 76mm × 横 100mm)。



写真 1-3. 明治神宮競技場での走り幅跳び
(直筆サイン Mikio Oda：縦 76mm × 横 100mm)。



写真 1-4. 1929年第2回日本インカレに優勝して早稲田大学競走部の合宿所で(新宿区馬場下町、1929年：縦 109mm × 横 155mm)。左から小池省吾、織田幹雄、宮田信一、伊藤金太郎、藤木勲、能和信一(直筆サイン)、小山勝太、古山一郎の諸氏。 写真 1-5. 毛筆書きのサイン色紙(精進 織田幹雄)。



2) 人見絹枝氏のサイン入り著書

人見絹枝氏（1907年1月1日－1931年8月2日）は日本人女性として初めてオリンピックに出場しただけでなく、初のオリンピックメダリスト（陸上女子800m 銀メダル：2分17秒6の世界新記録）となった偉大な陸上競技選手である。オリンピックの陸上競技に女子種目がなかった時代の1926年（大正15年）に開催された第2回国際女子競技大会（スウェーデン・イエテボリ）に日本人女子選手として1人で出場し、走り幅跳び（5m50）と立ち幅跳び（2m47）で優勝、円盤投げ2位（33m62）、100ヤード走3位（12秒0）、60m走5位（8秒0）、250m走6位（記録不明）と、個人最高得点の15点をあげて国際女子スポーツ連盟の名誉賞（ミリア会長賞）を授与されている。アムステルダム大会では上位入賞を期待されていた100mの準決勝で敗退したために、たまたまエントリーしていた今まで一度も走ったことのない800mに出場して銀メダルを獲得した。

一方で彼女は1926年4月に大阪毎日新聞社に就職していることから文章力も高く、「女子陸上競技法」（1926年）、「スパイクの跡」（1929年）、「戦ふまで」（1929年）、「ゴールに入る」（1931年）などの単著以外にも共著を複数出版している。今回紹介した「戦ふまで」に記した自筆サイン「贈 斎藤巍洋様 著者」（本名は斎藤）の宛名の斎藤巍洋氏（さいとう たかひろ：1903年9月14日－1944年9月5日）は1924年パリ大会の男子100m背泳で1分19秒8の記録で6位入賞している。彼は1927年に立教大学を卒業後、大阪毎日新聞社に入社して運動部記者を務めていたことから、人見氏は同じ職場の先輩オリンピックにサインを入れた著書を謹呈したものと思われる。彼女は乾酪性肺炎のために24歳で夭折しているので直筆サインは極めて珍しく、著者の長年の収集歴の中でスポーツ博物館以外に実物を見たのは初めてであった。



写真2（左：表表紙、右：直筆サイン）。人見絹枝氏サイン入り著書「戦ふまで」（昭和4年11月4日三省堂発行）。宛名の斎藤巍洋氏は1924年パリ大会男子100m背泳6位入賞者である。

3) 日本選手団役員の記念アルバム

写真3-1～4に示した写真（縦180mm×横240mm）は、アムステルダムオリンピックに関わった日本選手団役員の中でアタッシュ（大会組織委員会と自国NOCとの仲介役を務め、旅行、宿泊、その他の問題解決を担当する）を務めた役員の記念アルバムの中に貼付してあった写真19枚中の4枚である。日本選手団役員の中でアタッシュを務めた人物は、ボート競技の監督も務めた郷隆氏（ごう たかし）だと思われる。アルバムの最初のページには「一九二八年 アムステルダム市アメリカンホテルに掲げる第一回各国アタッシュ會議」の写真が、2ページ目には「各国アタッシュ臨時會議」、3ページ目には「各国アタッシュ會議」、その後のページには「オリムピッ

ク入場式」、「オリンピック宣誓式」、「人見絹枝嬢の活躍（百米カー予選）十二秒八」、「人見絹枝嬢」、「米国女流水泳選手」、「英国女流選手團」、「マラソン競争（山田選手の奮闘）」、「馬術障害物競争」、「賞品授與式 蘭国女皇陛下 鶴田選手 竹中 岸會長」、「金メダル授與式」、「賞品授與式（オニオ三等賞）ヘンドリック親王殿下」、「Zaandam における日本選手歓迎會」、「Zaandam “HOTEL HET WAPEN van AMSTERDAM” における選手一行」など合計 19 枚の写真が貼付してあった。

アムステルダム市の北に隣接するザンダムという町のホテル「HOTEL HET WAPEN van AMSTERDAM」が陸上競技とボクシングの日本選手団の宿舎であった。ホテル前での集合写真（写真 3-4）には陸上選手の山口直三選手（4×100m リレーの補欠）が一人欠けている。この写真は人見氏の著書「スパイクの跡」にも掲載されている。

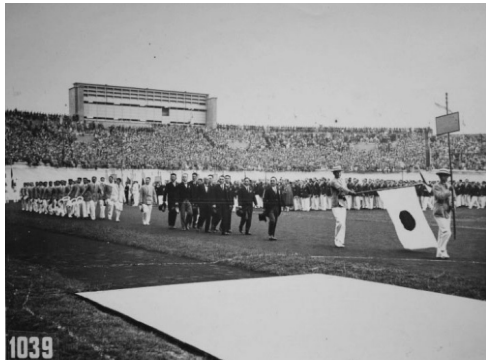
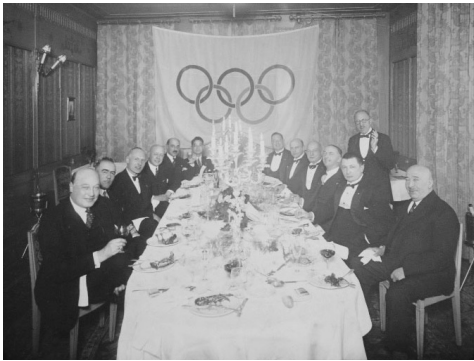


写真 3-1. 「各国アタッシュ會議」（左奥が日本代表）。 写真 3-2. 「オリンピック入場式」。



写真 3-3. 「人見絹枝嬢」。

写真 3-4. 「HOTEL HET WAPEN van AMSTERDAM」に就ける選手一行。左端から（顔の位置順で同位置のときは前から）竹内廣三郎（陸上監督）、中沢米太郎、1人置いて、山田兼松、1人置いて、沖田芳夫、永谷寿一、1人置いて、臼田金太郎、1人（顔上半分）置いて、岡本不二、人見絹枝、木村一夫、南部忠平、2人置いて、住吉耕作、大澤重憲、織田幹雄、古山一郎、津田晴一郎、三木義雄、山本忠興（日本選手団団長）、斎 辰雄、井沼清七、相沢巖夫、渡辺勇次郎（ボクシング監督）。

4) 臼田金太郎氏の第九回万国オリンピック大会記念盾と派遣選手歓迎大會記念報告書

写真 4-1 にはアムステルダムオリンピック終了後の 1928 年 10 月 28 日に日比谷公園で開催さ

れた派遣選手歓迎会で臼田金太郎氏（1906年9月25日－1980年5月27日）に贈られた記念盾であり、「グラフィックカラー昭和史」にも掲載されていた。臼田氏は1923年1月に日本拳闘倶楽部（以下日俱：創立者は渡辺勇次郎氏）に入門し、1924年2月に行われた日本最初のアマチュア試合である学生拳闘大会でサウスポーのファイターとして初タイトルを獲得した（当時植民貿易語学校の学生：当時の校長は新渡戸稲造で現在の保善高校）。1924年4月に明治大学に入学後に拳闘部を創り、日本ライト級王座決定戦で川上清氏（日俱）との8回戦に勝利して18歳にしてプロの初代王者に認定された（当時はプロとアマの明確な区別がなかった）。1925年には単身マニラに遠征して7連勝し、また1927年には中村金雄氏とともに渡米して西部地区11州（Far Wester）のウェルター級チャンピオンとなり、この戦績と1928年第2回全日本アマチュア選手権に勝ってアムステルダム大会の日本代表となった。

オリンピックでの戦績は、1回戦がフェルナンデス選手（スペイン）に判定勝ち、2回戦がホール選手（ローデシア）に判定勝ち、準々決勝のスマリー選手（カナダ：銅メダル）に判定負けした。これに対して渡辺監督は「六尺の長身スマリーに猛ラッシュして一回目は互角、二回目に敵は鼻血を出し苦闘を続け、最終ラウンドにおいても臼田有利で左右撃はまともに鼻へ到る。敵はヨロめくなど段違いの優勢があったが・・・判定は意外にも敵に・・・。」と評しており、ボクシング競技に初出場した日本選手に対して公平公正な判定がなされなかったとの思いが感じられる。

写真4-2～3は、第9回オリンピック派遣選手歓迎大会記念報告書の表表紙と報告書内の写真を示した。当時の田中義一内閣総理大臣の祝辞や派遣選手代表の挨拶などが行われ、その時の写真が掲載されている。また歓迎会実行委員会はその開催のための寄付を募っており、高額寄附者から順番に芳名が記載されていた（写真4-3）。その中には当時の著名な財界人の名前があり、2021年のNHK大河ドラマ「青天を衝け」の主人公となった渋沢栄一氏が300円（当時米1俵が10円で現在が1万6千円だと仮定すると48万円に相当する）寄付している。



写真4-1. 第九回万国オリンピック大会記念盾の箱（左）、記念盾（中：縦192mm×横129mm）、記念盾メダルの拡大写真（右：贈 臼田金太郎君 オリンピック選手歓迎会 主催 都下各大学専門学校校友学生聯合会 1928：直径33mm）。



写真4-2. 第9回オリンピック派遣選手歓迎大会記念報告書の表表紙（左：縦268mm×横192mm）と報告書内の歓迎風景写真（右）。

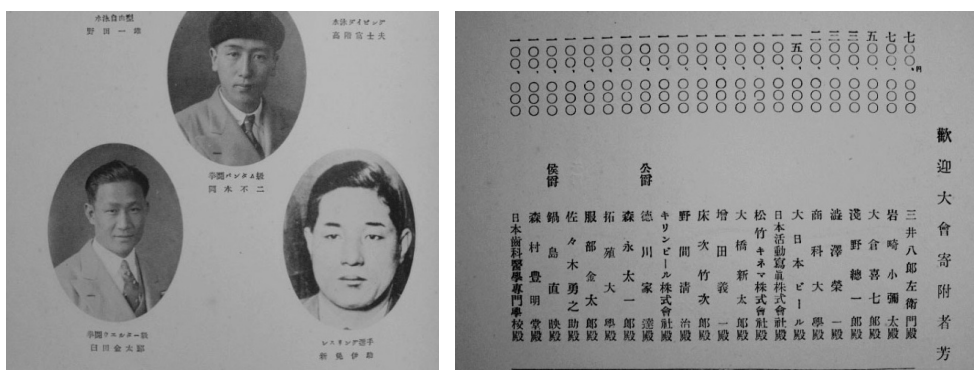


写真4-3. 報告書内の拳闘選手とレスリング選手の顔写真（左）と歓迎大会寄附者芳名（右）。

5) 陸上女子4×100m リレー銅メダルのレニ・ユンカー氏のサイン入り写真

写真5-1は、アムステルダム大会の陸上女子100mと4×100mリレーに出場したドイツのレニ・ユンカー氏（Leni Junker：1905年12月8日－1997年2月9日）の直筆サイン入り写真である。彼女は1924年、1926年及び1928年に3回12.2秒の世界記録を樹立し、また1931年に女子100mで、1932年に女子80mハードルでドイツチャンピオンとなった。100mのベスト記録は1931年に出した12.0秒（当時世界タイ記録）であった。オリンピックの女子4×100mリレーでは、ケルナー、シュミット、ホルドマン、ユンカーのメンバーで銅メダル（49秒0）を獲得したが、女子100mでは本命の一人でありながら準決勝で落選して決勝進出を果たせなかった。

1928年7月30日に女子100m予選が行われ、人見は3組に、ユンカーは4組に出場し、ともに予選を通過した。準決勝では予選通過者の18名は3組に分かれ、各組2着までが決勝に進出する。1組はローゼンフェルド（カナダ）が12秒4で1着、スミス（同）が2着となり、決勝進出を果たした。人見は2組に出場し、ロビンソン（米）が12秒4で1着、クック（カナダ）が2着、人見は後方にいたユンカーにさえ抜かれて4着^{注2)}となって落選した。3組はシュミット（ドイツ）が12秒8で1着、ステインベルグ（同）が12秒9で2着となった。決勝ではロビンソンが12秒2で優勝し、ローゼンフェルドが2位、スミスが3位、ステインベルグが4位となった（クックとシュミットはフライングで失格）。

この時代に組分けはどういう基準で実施されていたか不明であるが、準決勝1組1着のローゼンフェルド以外は準決勝2組が実質的に決勝進出するメンバー（優勝候補のロビンソン、世界記録保持者のクックとユンカー、5月に世界タイ記録を出した人見）が集中した感じを受ける。1組と2組の1着が12秒4で、3組の1着が12秒8で2着が12秒9であることから公平な組分けには感じられない。著者の主観としては、1926年第2回国際女子競技会などですでに世界的に活躍していた唯一東洋人の人見を勝たせないための2組であったかのように感じられる。

女子4×100mリレーは、1928年8月4日（予選）、8月5日（決勝）の日程で実施され、8チームが出場した。ドイツチームは予選2組で1位のアメリカチーム（49秒8）に続いて同タイムで2位となって決勝に進んだ。決勝では予選でも世界新記録（49秒3）を出していたカナダがその記録を大幅に縮める48秒4の記録で優勝し、アメリカが48秒8で2位となった。ドイツは49秒0の記録で3位に入り、銅メダルを獲得した。

写真5-2はアムステルダム大会の銅メダルである。この賞メダルのデザインはイタリア人のギュセッペ・カシオリ氏（Giuseppe Cassioli）によるものであり、1928年アムステルダム大会（夏季大会）以降統一されたが、1972年ミュンヘン大会以降（1984年ロサンゼルス大会は例外）は裏面が、2004年アテネ大会以降は表面のデザインが変更された。また1956年メルボルン大会まではメダルと専用ケースのみが授与され、1960年ローマ大会以降はメダルに首掛けが付いて表彰式で首にかけられるようになった。



写真5-1（左）. 女子4×100mリレー銅メダリストのレニ・ユンカー選手の直筆サイン入り写真（縦149mm×横105mm）

写真5-2（中は表面・右は裏面）. アムステルダムオリンピックの銅メダル（直径55mm、厚さ3.8mm、重さ74g）.

3. おわりに

2020年（令和2年）に開催予定されていた第32回東京オリンピックは世界的な新型コロナウイルス感染症拡大のために大会史上初めて2021年（7月23日～8月8日）に1年延期のうえほとんどの競技が無観客で実施された。陸上競技の男子4×100mリレーの日本チームは前回のリオデジャネイロ大会で銀メダルを獲得していたために今大会では金メダルを期待されていたが、決勝で1走から2走へバトンが繋がらずに失格となってしまった。この結果については、男子

100m に出場したリレーメンバー 3 人全員が予選で敗退していたこと、リレーの予選では 16 チーム中 9 番目の記録（日本は 38 秒 16 の記録で 1 組 3 着だったが、アメリカが 38 秒 10 の記録で 2 組 6 着となって落選している）で決勝進出したことなどから考えると金メダル獲得は厳しかったと考えるのが妥当であり、過剰な期待や重圧があったことも一因であったことは否めない。

アムステルダム大会でも、日本国民や関係者の大きな期待があった女子 100m の準決勝で落選した人見選手は「100m に負けました、と言って日本の地を踏める身か、踏むような人間か、何物かを以て私はこの恥を雪ぎ、責任を果たさなければならない。・・・あと残されたものは 800m でありました。・・・800m を走るだけの力は持っていない。出場するだけ恥になる。しかし、私はもう勝つ負けるは問題でなかった。走るだけ走ってみよう。・・・斃れるまでやってみよう」と決心した。」と彼女の悲痛な気持ちが伝わる。そのため彼女は過去に 1 度も走ったことのない女子 800m 出場を希望し、このことに猛烈に反対していた竹内廣三郎監督を説得して、予備としてエントリーしていた 800m に出場することになって銀メダルを獲得している。著者の第一報でも、1964 年東京大会のマラソンで銅メダルを獲得した円谷幸吉選手（1968 年メキシコ大会で金メダルを期待されていたが同年 1 月に自殺した）の例を出したように、選手たちが過剰な期待や重圧に負けないような精神力を養うことも必要ではあるが、スポーツを観戦する一般国民やマスコミは「メダル、メダル」などと選手やチームを過度に期待したり煽り立てたり、同時にメダルを取れなかった選手や予選落ちした選手に対して過度に落胆したり批判したりするような態度は厳に慎むべきである。日本代表選手たちは世界ランキングが上位となったり日本選手権などで優勝したりして厳しい選考を経て日本代表に選ばれていることから、大会本番では単に勝ち負けだけではなくそこまで至る過程や戦い方などを尊敬の心を持って評価できる観戦者となってもらいたい。

注釈

注 1) 1928 年アムステルダム大会の選手参加人数については、「第九回国際オリンピック競技大会報告書」によれば「参加国四十六カ国選手総数四千名以上」とのことであり、「オリンピック事典」には 46 カ国 3,014 名、「Chronicle of the Olympics」には「around 3000 athletes from 46 nations」（46 カ国から約 3,000 名）、「<https://Olympics.com/>」によれば「46 カ国 2,883 名（女子 277 名、男子 2,606 名）」、「近代オリンピック 100 年の歩み」や「ウィキペディア」には「46 カ国 2,694 名」となっており、選手参加人数は諸説ある。

注 2) アムステルダム大会での女子 100m 準決勝 2 組におけるレニ・ユンカー選手の順位は「sports-reference」や「ウィキペディア」では 5 位となっているが、人見絹枝氏の関連図書や「第九回国際オリンピック競技大会報告書」ではいずれも「（人見選手は）ユンカー選手にも抜かれて 4 位となった」と記述されているのでユンカー選手は準決勝で 3 位であったことになるが、現時点では事実是不明である。

参考文献

- ・Adult, D.K. Chronicle of the Olympics. Dorling Kindersley, London: 1996.
- ・大日本体育協會. 第九回国際オリンピック競技大会報告書. 大日本体育協會, 東京: 1930 年.
- ・藤瀬武彦. スポーツ文化財としてのオリンピック関連資料の収集について 第一報 - 1912 年、1940 年、及び 1964 年夏季オリンピックに関する収集体 - . 新潟国際情報大学国際学部紀要, 4,

145-157, 2019 年.

- ・月刊陸上競技編集部. 記録年鑑 2020. 月刊陸上競技 2021 年 4 月号別冊付録, 講談社, 東京: 2021 年.
- ・Greensfelder, J., Vorontsov, O., and Lally, J.. OLYMPIC MEDALS
A REFERENCE GUIDE. GVL Enterprises, OH, USA: 1998.
- ・人見絹枝. スパイクの跡. 平凡社, 第五版, 東京: 1930 年.
- ・池田一秀編集. グラフィックカラー昭和史 第 3 巻 大衆と文化(戦前). 研秀出版, 東京: 1993 年.
- ・国民体育會. 国民體育. 大正十五年十二月號, 東京: 1926 年.
- ・競走部七十年史編集委員 (委員長 西田修平). 早稲田大学競走部七十年史. 早稲田アスレチック倶楽部 (代表 沖田芳夫), 東京: 1984 年.
- ・日本オリンピック委員会. オリンピック事典. 日本オリンピック委員会監修, 日本オリンピック・アカデミー編, プレス ギムナスチカ, 東京: 1981 年.
- ・日本オリンピック委員会. 近代オリンピック 100 年の歩み. ベースボール・マガジン社, 東京: 1994 年.
- ・日本体育協会編. 日本スポーツ百年. 財団法人日本体育協会, 東京: 1970 年.
- ・小原敏彦. 忘れられた孤独のメダリスト KINUE は走る. 健康ジャーナル社, 東京: 2007 年.
- ・織田幹雄. 改定増補 陸上競技百年. 時事通信社, 東京: 1970 年.
- ・織田幹雄. 金メダル. 早稲田大学出版部, 東京: 1972 年.
- ・織田幹雄, 戸田 純 編著. 炎のスプリンター 人見絹枝自伝. 山陽新聞社出版局, 岡山: 1983 年.
- ・陸上競技マガジン編集部. 特集東京五輪 2020. 陸上競技マガジン, 9 月号, ベースボール・マガジン社: 東京: 2021 年.
- ・小川邦彦. 甦る伝説 拳闘史 アマチュアボクシング 70 年の歩み. 企画オガワ, 東京: 1993 年.
- ・斎藤正躬. 名選手 スポーツに賭けた人生. 日本経済新聞社, 東京: 1966 年.
- ・<https://Olympics.com/ja/Olympic-games/Amsterdam-1928>
(アムステルダム 1928 夏季オリンピック - アスリート、メダル、結果 (olympics.com)) (2021 年 12 月 2 日確認).
- ・早稲田大学競走部百年史編集委員会. 早稲田大学競走部百年史. 早稲田アスレチック倶楽部, 東京: 2014 年.
- ・SR/OLYMPIC SPORTS (<https://www.sports-reference.com/olympic/summer/1928/ATH/womens-100-metres.html>: 2021 年 12 月 2 日確認).
- ・Olympedia-Leni Junker (<https://www.olympedia.org/athletes/90019>: 2021 年 12 月 2 日確認).
- ・ウィキペディア (Wikipedia). 1928 年アムステルダムオリンピック (2021 年 12 月 2 日確認).
- ・ウィキペディア (Wikipedia). 人見絹枝 (2021 年 12 月 2 日確認).
- ・ウィキペディア (Wikipedia). 斎藤巍洋 (2021 年 12 月 2 日確認).
- ・ウィキペディア (Wikipedia). 白田金太郎 (2021 年 12 月 2 日確認).